Death Education に関する研究

西村昂三

［総括報告書］

Death Education に関する研究を

①臨死患児の心理的特徴は？

②小児のターミナル・ケアの現状は？

③予後不良患児の疾病教育は？

の三つのリサーチ・クエスチョンを設定して研究した。先ず、

①一般小児の死の概念の発達について研究協力者宮本信也が心理面を中心に死と悪性疾患（白血病・がん）に対する意識を研究し、また小児の死、特にDeath Education について、わが国の社会的、宗教的側面からみた考え方を研究協力者井原彰一が精神科医ならびに宗教家の立場から検索し、白血病を中心とする小児がん患児を対象に研究協力者中澤眞平はその保護者の心理面の特徴を臨床的に追究した。

②わが国における小児のDeath Education の現状を把握するため研究協力者濃沼信夫が小児の医療従事者にアンケート調査を行った。

③予後不良患児の疾病教育についての研究は、先ず小児がん末期患児の治療上の問題点と対策について研究協力者高山順が、また看護の立場から研究協力者田原幸子が病院における患児、家族のＱＯＬの調査を行い、研究協力者細谷亮太が白血病を中心とする小児がん患児若干名に疾病教育を実施した。なお、研究協力者舘崎慎一郎は、骨・軟部悪性腫瘍の患児を対象に年長小児のターミナル・ケアの研究を、研究協力者恒松由記子は集団疾病教育のあり方を研究した。

研究結果を総括すると、小学 5･6年生では人間と動物に対し異なる死の意識を有しており、動物に対してより即物的な死のイメージを持っていた。人の死は、外から暴力的に襲ってくるものとしてうけとめられていたことが判明した。

ターミナル・ケアにおいては、保護者と医療者が身近な存在として、お互いを認識することが、患児の死への共通理解を深めるものと思われた。ターミナル・ケアの実態調査では多くの医師が患児の精神面の対応、痛みのコントロール、専門スタッフの養成などの重要性を認識しているが、十分に実施できていない状況がみられ、ＱＯＬ評価やスタッフの教育・研修は低調であり、病気の説明、死の表現についても施設間で大きな差異が認められた。小児がん末期患児の在宅医療を普及するには医師や看護婦の訪問、地域の病院・保健所・健康センターなどと緊密な連携をシステム化していくことが必要であると思われた。また、患児の疾病教育の前提には両親への疾病教育、さらに、そのバックになるのは社会全体への疾病教育ないしはDeath Education の普及が必要で、この分野は小児がんなど致命的になる可能性のある疾患の医療の中での大きな専門分野になるべきであると考えられた。なお、集団疾病教育は一人で知らされるより緊張感が少なく教育的効果が大きいと報告された。

また、骨肉腫など骨・軟部悪性腫瘍では治療により身体障害を伴うのが普通であり、告知ないし

は疾病教育を行う傾向が強くみられた。身体障害を伴う患児のターミナル・ケアは在宅で行うことは困難であったが、死の直前まで生にたいする執着心が強いことが判明した。

以上、小児の疾病教育、特にDeath Educationは、わが国の死についての社会的、宗教的な背景から考えても欧米と同じレベルで行うには難点が少なくないように思われたが、患児と両親の治療への協力を得るためには疾病教育の充実が強く望まれた。また、それと共に、わが国の臨死患児のケアを改善するためには、医療施設の利用法を再考することが必要と思われた。末期になり高度の医療施設を必要としなくなった臨死患児をいつまでも入院させている現状を再考し、デイ・ケアの活用や在宅医療に切り換える道をさぐることが必要で、これは、同時に患児ならびに両親・家族のＱＯＬ向上にも、つながることと思われた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

[総括報告書]

Death Educationに関する研究を

①臨死患児の心理的特徴は?

②小児のターミナル・ケアの現状は?

③予後不良患児の疾病教育は?

の三つのリサーチ・クエスチョンを設定して研究した。先ず、

①一般小児の死の概念の発達について研究協力者宮本信也が心理面を中心に死と悪性疾患(白血病・がん)に対する意識を研究し、また小児の死、特にDeath Educationについて、わが国の社会的、宗教的側面からみた考え方を研究協力者井原彰一が精神科医ならびに宗教家の立場から検索し、白血病を中心とする小児がん患児を対象に研究協力者中澤眞平はその保護者の心理面の特徴を臨床的に追究した。

②わが国における小児のDeath Educationの現状を把握するため研究協力者濃沼信夫が小児の医療従事者にアンケート調査を行った。

③予後不良患児の疾病教育についての研究は、先ず小児がん末期患児の治療上の問題点と対策について研究協力者高山順が、また看護の立場から研究協力者田原幸子が病院における患児、家族のQOLの調査を行い、研究協力者細谷亮太が白血病を中心とする小児がん患児若干名に疾病教育を実施した。なお、研究協力者舘崎慎一郎は、骨・軟部悪性腫瘍の患児を対象に年長小児のターミナル・ケアの研究を、研究協力者恒松由記子は集団疾病教育のあり方を研究した。